

作物別技術情報 5月

作物

1 水 稲

(1) 苗の硬化

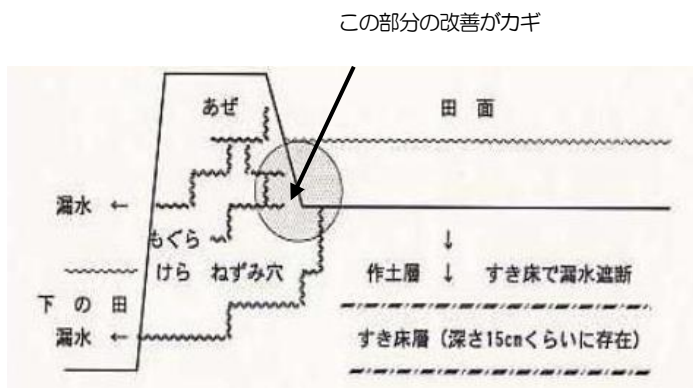
育苗の 1.5～2 葉期は、胚乳の養分がなくなる「離乳期」にあたります。この時期はムレ苗や立枯病が発生しやすく、温度変化も激しい時期なので、温度管理等に注意してください。温度管理は 12～22℃を目標とし、昼間は 25℃以上にならないようにトンネルを開けて外気に慣らします。ただし昼間風の強い時、また、気温が低い時はトンネルの開きを細めにします。

田植えが近づいたら気象の状況を見ながら被覆を外し、できるだけ外気に慣らします。夜間も霜の心配がない限り被覆しないで管理します。

育苗様式	田植え時の苗質	
	草丈	葉数
稚苗	10～15cm	2.0～2.5 葉
中苗	15～20cm	3.0～4.0 葉
ポット	15～20cm	4.5～5.0 葉

(2) 漏水の防止

水田の水持ちを改善すると、その後の栽培管理が楽になります。水温の保持、除草剤の効果安定のため減水深は 2 cm/日程度以下を目標にします。水持ちの悪い水田は、ねずみやモグラの穴等、畦畔からの漏水（横浸透）が原因である事例が多く見られます。この場合は畦塗り、畦シートの設置等、畦畔の補修が必要となります。



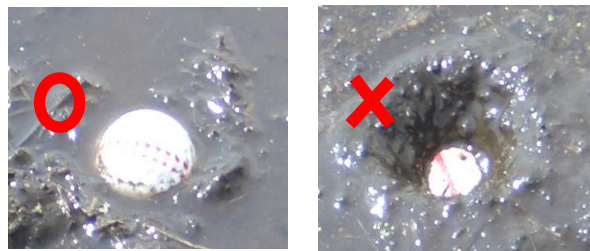
漏水のイメージ

(3) 代掻き

砂質等の漏水田では丁寧にやりますが、水持ちの良い水田では練りすぎないように注意します。また、代掻きは均平に重点をおいて作業します。代掻き時の湛水量は、水面に土塊が 30%程度出るようにして作業すると、凹凸がわかりやすいため均平し易くなります。また、稲わら等を施用した水田では、浅水にして土中に完全に埋没させるようにします。植付精度の向上や除草剤の効果を高めるために、水田内の高低差は 3～4 cm 以内を目標にしてください。田植え時の土壌の硬さは、指で作った溝が数秒で消える程度、またはゴルフボールを 1 m の高さから落として、ボールの表面が 0～1 cm 土壌表面に出る硬さが適当です。これより硬いと浮苗や損傷苗が発生しやすく、植穴が塞がらず根が露出していると除草剤の薬害が出やすくなります。

土壌種類別代掻き後田植えまでの日数

土壌種類	砂壤土	壤土・埴壤土	火山灰土
日数の目安	1～2日	2日	3～4日



ゴルフボールによる硬さの目安

まや、軟らかすぎると埋没苗や倒伏苗が発生します。

（４）田植え

- ・暖かい日に田植えをし、田植え後は田面を出さない水管理をしましょう。
- ・植付本数は中苗では3～4本/株、稚苗の場合は4～5本/株にしましょう。
- ・深植えしないように気をつけましょう。（深さ3cm以内を目安にする）
- ・4%以内の欠株は収量に影響しません。植え直しをする場合は除草剤散布前に行いましょう。

（４）除草剤

多くの水田除草剤のラベルには「移植後〇日（直播栽培では稲〇葉期）～ノビエ〇葉まで、但し移植後×日まで」の表記があります。これは除草剤の使用時期と、ノビエの生育状況から見た除草剤の効果時期を表しています。使用する場合はこの範囲で使用します。また、散布量も定められた量を守りましょう。

各除草剤には対象となる雑草が記載されています。そのため水田に発生する雑草に有効な除草剤を選択する必要があります。雑草の多い水田、長期にわたって発生するアメリカセンダングサ、クサネム、多年生で塊茎を持つオモダカ、クログワイなどの雑草が発生する水田では、初期除草剤（移植前後処理）＋初中期除草剤（残草がある場合は＋中期または後期除草剤）の体系防除が有効です。

2 麦

（１）止葉展開期・出穂期の追肥

止葉とは、最後に抽出する葉のことです。この葉の次には穂が出ますが、ほ場の約半数程度の主茎で、止葉が出た時期が止葉展開期です。止葉展開期の追肥は、倒伏を助長することなく粒の肥大を図り、千粒重・容積重・タンパク質含量を高める効果があります。

近年、長野県産の小麦はタンパク質含量や容積重で基準値を満たさない事例があり、製粉会社等の実需者から品質向上を強く求められています。この時期の追肥を確実にを行うことで、産地全体の品質を向上させましょう。

うどん用等の軟質小麦（しゅんよう、ユメセイキ等）は止葉展開期に窒素成分で2～3kg/10a程度、ハナチカラは出穂～穂揃い期に窒素成分で6～8kg/10aを目安に施用します。

今年は麦の生育が進んでおり、凍霜害の発生が懸念されます。凍霜害が発生した場合は、被害程度に応じて追肥の量を減らしてください。

（２）赤かび病の防除

赤かび病に感染した麦子実を食用や飼料用にすると、かび毒（DON：デオキシニバレノール）による中毒症状が起こることがあり、検査規格上混入は認められません。（規格では0.0%。実質1粒でも混入すると規格外）。

赤かび病は、開花期に曇天・少雨が続き、25℃程度の高温があると多発します。今後の気象予報に留意し、出穂期に降雨が続く場合は防除を徹底します。また、収穫期の降雨も発生を助長するため、適期収穫が重要となります。

さらに、倒伏や凍霜害による不稔の発生は感染を助長します。薬剤による防除適期は開花始め（ほ場にある茎の半分が出穂してから7～10日後）です。使用農薬については、JA、農業農村支援センターにお問い合わせください。

